

機関番号：14601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520411

研究課題名（和文）体系的観点を取り入れた最適性理論にもとづく日本語音韻史研究

研究課題名（英文）Systemic Optimality Theoretic Studies on Japanese Phonological History

研究代表者

前田 広幸 (MAEDA HIROYUKI)

奈良教育大学・教育学部・教授

研究者番号：40219275

研究成果の概要（和文）：

本研究では、次の2点を中心とする成果をえた。第一には、京阪語史の中で生じたと考えられる分節-超分節特徴間の相関（すなわち Voiceless-HighPitch v. s. Voiced-LowPitch）について、そのような有標性制約のランキング昇格が体系的に生じたと考えられる時期は、平家正節期よりも下ると考えられる点。第二に、通常白声や口説で無譜記になることがない、WH 疑問文中の Focus 要素である疑問詞が、無譜記となる一つの場合として、罵倒のような強い感情態度を伴う表現に直接後続した場合があり、その場合両者が統語的修飾関係になくても、Focus 要素より左周辺部に位置した Emphatic 要素の卓立により、Focus 要素の卓立が抑制されたケースとみなしうる点を、最適性理論の枠組みをもとに分析した点、である。

研究成果の概要（英文）：

As part of the main results obtained through this research project, the following two points are included. First, the systematic promotion of the markedness constraint concerning the segmental-suprasegmental feature interaction (i. e. Voicelss-HighPitch v. s. Voiced-LowPitch) over other relevant features is considered to have occurred after *Heike Mabushi* period in the phonological history of Keihan Japanese. Second, to focal elements in *shiragoe* or *kudoki* formulaic melody part of *Heike Mabushi*, musical notes are almost always annotated, and similarly, pejorative expressions are also intonationally strong elements and almost always annotated by musical notes; however, if these two types of *strong* elements stand in an adjacent position, one of them sometimes weakens.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：日本語音韻論

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：アクセント、平家正節、最適性理論、付属語、平曲、墨譜

1. 研究開始当初の背景

日本語音韻の音調史については、アクセント研究は盛んであったが、イントネーションについては資料的制約のためほとんど研究はなく、平曲譜本を利用した研究の試みがわずかに存在している程度であった。本研究課題申請者は本研究開始までの間に、語アクセントや文末イントネーションといった音調特性の現代における地域差について具体的研究成果をえると同時に、そのようなバリエーションの背後にみられる一般性をとらえるための言語理論として、近年の音韻理論の中で重要な位置をしめる最適性理論の枠組みを用い、喉音特性と鼻音性や音調特性とのかかわりについて分析を行ってきた。

このような研究背景のもと、本研究課題では、一つにはやはり喉音特性、鼻音性と音調特性とのかかわりに注目し、もう一つには、句レベルでの音韻的なまとまり形成のあり方に注目しながら、平家正節を主とする平曲譜本に反映したアクセント・イントネーションと現代京都語の体系との間での変化を中心に、通時的研究を進める計画を立案したものである。

2. 研究の目的

『平家正節』における譜記データ（本格的な索引がすでに刊行されている口説や素声以外の曲節部分も対象とする）を機械可読化する作業をまず行い、そのデータをもとに、体系的観点を取り入れた最適性理論の枠組みの中で、語や句の音調形成のしくみが、『平家正節』の譜記に反映された体系から、現代京都語の体系との間でどのような変化を起こしたか、あるいは、起こさなかったか、喉

音特性や鼻音性とのかかわりにも留意しながら分析し、音声的变化と体系的変化との関係の一端を、新たな視点から解明することが本研究課題が期間中に目指すところである。

3. 研究の方法

本研究を行う上での基礎資料として、青洲文庫本『平家正節』を中心資料とし、個々の文字や墨譜付けが有する非弁別の特徴（こまかな位置の違い、大きさの違い、墨色の違い等）はひとまず捨象し、ほぼ文字単位でどのような補助符号が付されているかを符号化し、さらにその上でどのような語や句がつくられているかの構造情報を付加したデータベースを作成し、計量的分析を行った。なお句レベルでの音韻的なまとまりも考慮し行った情報付加は、前田広幸(2007)「平家正節無譜記語の音調解釈」奈良教育大学国文学会『国文 研究と教育』30: 21-32 中で掲げた枠に沿ったものである。

また、体系的観点を取り入れた最適性理論の枠組みにおける理論的分析については、研究初年度と2年度にそれぞれ、海外の国際学会で最新の研究動向に関する情報収集を行い、それらをふまえて研究最終年度に、本研究による成果を海外の国際学会における3回の研究発表を通じて発信する活動を行っている。このことは、平曲譜本に反映した音調研究という一見特殊にみえる分析作業からえられた成果について、一般言語学視点からの評価・位置づけを行い、広くそれを発信することが本研究において方法論上要請されている不可欠の部分であるとの認識を反映したものである。

4. 研究成果

以下、本研究によりえられた主な成果について、年度ごとに分け、記述する。

(1) 2008 年度（平成 20 年度）

本研究では、日本語の音調データについて、平家正節を中心としたアクセント史資料データをもとに比較・対照研究を行い、体系的観点をとりにれた最適性理論の枠組みにもとづき、理論的分析を行おうとしている。

研究初年度にあたる平成 20 年度には、アクセント史資料の文献調査を行うとともに、海外の関連シンポジウムに出席し、理論的枠組みの最新の研究動向について、情報収集をおこなった。

また、これまでの調査結果にもとづき、現代共通語・京都語・倉敷語および平家正節データという 4 つの日本語変種における「ーモ」のアクセントデータを対照し、研究論文 1 篇の発表をおこなった。そこでは、主に次の 2 点について論じている。① 現代京都語で生じている低起無核化は平家正節期よりも新しい発達と考えられる点、② 共通語と、倉敷語をはじめとする 5 地点の岡山語・広島語データとを調べると、全面否定の「不定語＋モ」のアクセントを、各地の基底における不定語およびモのアクセント特徴指定だけからすべて計算することはできないと考えられる点、である。

(2) 2009 年度（平成 21 年度）

研究 2 年目にあたる平成 21 年度は、前年度に引き続き、資料のデータベース化をさらにすすめるとともに、海外の関連学会に出席して理論的枠組みの最新動向について情報収集を行い、また平成 21 年度中に成果を刊行・発表するところまでは進まなかったが、これまでの本研究による成果をもとに、共著

書(岩波書店『シリーズ日本語史 第 1 巻 音韻史』)へ寄せる原稿草稿を執筆して編集者のもとへ届けるとともに、国内の関連学会(日本語学会)でのシンポジウム企画(2010 年 10 月 23 日「イントネーション研究の現在」)を主担当者として立て、また、単独で平成 22 年度に海外の国際会議(2010 年 5 月 28 日 International Phonetics-Phonology Conference Shanghai)で研究成果発表を行うためのアブストラクト投稿を行い、発表を受理された。翌平成 22 年度に本研究により得た成果を本格的に発表するための礎となる活動を着実に進めた年であったといえる。

(3) 2010 年度（平成 22 年度）

研究最終年度にあたる平成 22 年度は、これまでに行った資料の調査・データベース化作業と理論的分析結果をもとにさらにそれらをブラッシュアップし、研究成果の発表を積極的に行った。具体的には次の 3 種の成果発表を行った。① 海外で催される国際会議で本研究成果の一部を盛り込み 3 件の発表を行った。② 国内で刊行される日本語音韻史をテーマにした講座物単行本の記述、および、コーパス言語学をテーマにした講座物単行本の記述に本研究成果の一部を盛り込んだ。③ 国内の関連学会で開催されるシンポジウムの企画運営に参画しそこでの討議に本研究成果の一部を反映させた。

① MAEDA (2010a, 2010b, 2011a)

② 岩波書店刊『シリーズ日本語史 第 1 巻 音韻史』の本研究代表者担当部分(2011 年秋刊行予定)、および、MAEDA (2011b)

③ 日本語学会 2010 年秋季シンポジウム「イントネーション研究の現在」の企画、問題提起、司会担当 (MAEDA 2010c)

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計3件)

- ① MAEDA, Hiroyuki. 2010a. Tonal feature borrowing and change in the history of Sino-Japanese stem-level verb compounds. presented at *International Phonetics-Phonology Conference Shanghai: "Accent on Tone"*, (May 28, 2010, Shanghai International Studies University).
- ② MAEDA, Hiroyuki. 2010b. How focus structures and emphatic attitudes affect narrative melody — an analysis of a musically annotated Japanese text: *The Tale of the Heike*. Presented at *Globe 2010 conference: "Prosody and Discourse"*, (Nov 26, 2010, University of Warsaw).
- ③ MAEDA, Hiroyuki. 2011a. Another case of laryngeal feature C-V interaction. presented at *Winter International Conference on Linguistics 2011*, (Jan 5, 2011, Korea Univesity).

[図書] (計2件)

- ① 前田広幸 2008. 「「へモ」のアクセントをめぐって —現代共通語・京都語・倉敷語 および平家正節データを対照して」『言葉と認知のメカニズム』 pp. 531-543. ひつじ書房.
- ② 前田広幸 2011b. 「5章 ウェブと他のコーパスとの比較」『講座 IT と日本語研究 第6巻 コーパスとしてのWWW』 pp. 185-217. 明治書院.

[その他]

- 前田広幸 2010c. 「イントネーション研究の現在」日本語学会 2010 年度秋季大会シン

ポジウムの企画、問題提起・司会担当 (2010年10月23日開催、於・愛知大学) 『日本語の研究』 7-2:75-80 に報告掲載.

関連 URLs :

MAEDA(2010a) <http://linguistlist.org/issues/21/21-2329.html>

MAEDA(2010b) <http://globe.ils.uw.edu.pl/index.php?section=9&subsection=8>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前田 広幸 (MAEDA HIROYUKI)
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号 : 40219275